

プログラム・ノート

柴田克彦

サントリーホール室内楽アカデミー出身の若手筆頭格クアルテットが、昨年の練木繁夫(ピアノ)に続いてファカルティの磯村和英と共演。弦楽五重奏きつての名作を披露する。精緻な四重奏にレジェンドのヴィオラを加えた五重奏の厚みや奥行きに大きな期待が集まる。

モーツァルト：弦楽五重奏曲第4番 ト短調 K. 516

古典派の天才ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756～91)は、弦楽四重奏にヴィオラを加える形で6つの弦楽五重奏曲を残した。中でも円熟期の1787年4～5月にウィーンで完成された第3番 ハ長調と第4番 ト短調は好対照の名作となっている。

本作はモーツァルトの“宿命の調”ト短調の色合いが濃く、特に第1楽章は冒頭主題の哀切なトーンが全体を支配している。なお小林秀雄の評論『モーツァルト』に書かれた「モーツァルトのかなしさは疾走する」はこの冒頭部分を指している。さらにメヌエットもト短調である上、第2楽章に置かれたことで悲劇的な楽章が2つ続き、変ホ長調の緩徐楽章(第3楽章)も全楽器が弱音器付きで奏されて、瞑想的な空気を醸し出す。第4楽章はモーツァルトのフィナーレには稀な序奏が付されている。そこで再びト短調の憂愁に包まれ、明朗なト長調に変わる主部も「慰めなき長調」(音楽学者アルフレート・アインシュタイン)と称されている。

ドヴォルジャーク：弦楽五重奏曲第3番 変ホ長調 作品97

チェコ国民楽派の大家アントニン・ドヴォルジャーク(1841～1904)は3つの弦楽五重奏曲を残した。1875年作の第2番ではコントラバスを用いたが、本作ではヴィオラ2本の通常編成に戻している。

この曲はアメリカ滞在中に生まれた名作の1つ。1892年9月、ドヴォルジャークはニューヨーク・ナショナル音楽院の創立者ジャネット・サーバーの誘いで渡米し、1895年4月まで同音楽院の院長を務めた。そしてこの間に、黒人霊歌やアメリカ先住民の音楽の要素と故郷チェコ・ボヘミアへの郷愁を併せ持つ作品を続けて作曲した。まず1893年5月に交響曲「新世界より」作品95を完成し、夏の休暇をアイオワ州のチェコ移民の村スピルヴィルで過ごした。彼は、故郷を彷彿させる環境に心が安らぎ、約2週間で弦楽四重奏曲「アメリカ」作品96を完成。続いて当地で書かれたのが本作である。

曲は「アメリカ」同様の民族色豊かでノスタルジックな音楽。ボヘミアとアメリカ地元音楽の双方に用いられている五音音階の旋律が哀感を帯びた懐かしさを生み出していく。また第1ヴィオラの活躍も際立っている。

(しばた かつひこ・音楽評論)